

“環境経営で頑張る” 「黒田紙業株式会社」さんを訪ねて

黒田紙業株式会社さんは、創業昭和8年、法人設立昭和36年の歴史を持ち、大津市に本社、県内に5営業所、京都市1営業所を拠点に、廃棄物の削減と資源の再利用を自らの社会的使命として、古紙のリサイクルを事業として展開されています。今回は大津市木の岡の国道161号線沿いにある、大津営業所を訪ね、黒田軒社長にお話を伺いました。

Q：ISO14001*1の認証登録を受けておられますが、目的・目標の重点は何でしょう？その成果は？

*1 企業や団体等の組織が事業活動を行う際に、環境への影響を考慮してどうマネジメントしていくかを示す規格

A：ISOの仕組みを事業に活用、重点は『古紙のリサイクルを推進する』ということですが

当初は規格の要求事項もそうなのですが、環境負荷をなくすというマイナスのイメージが強かったのですが、ある時、うちの場合は“事業としてやっていることが環境に貢献すること”とアドバイスもあり、まだまだISOの為にISOという側面も否めない点はあるものの、今までやってきているものを整理整頓して、仕組みとして動かせるようになってきたということです。行政・事業者・地域住民が対象になりますが、行政については資源ごみの回収、事業者は従来のダンボールの他に機密書類・シュレッダーとか、地域住民の方については自治会等を通して集団資源回収し、あらゆる『紙』を『紙ごみ』にならないようにしていこうというのが一番の重点です。



黒田軒社長

Q：『捨てない』『埋めない』『燃やさない』3ないシステムをどのように推進され、その苦労は？

A：「どこまでリサイクルできるか」「相場とコストの関係」を知ってもらうことです

日本の場合、古紙のリサイクルについては先進国ですし、根付いてはいるのですが、例えば処理の難しい古紙などどこまでリサイクルできるのかを知ってもらうことがまず第1です。もう一つはやはりコストとの関係です。古紙の市場は20年ほど前からグローバル化に伴い、海外相場と国内相場の二重相場になっています。古紙を排出される側の企業や団体が、相場を意識され高い価格で売ることばかり考えられると、不適切な処理やリサイクルが発生するなど、“リサイクル・持続可能な社会”を目指すための本来の仕組みに支障を来すこととなります。リサイクル業者が事業を維持継続できるための、相場とコストの関係を理解して頂けるよう、地道に説明していかなければならないと思っています。

A：国を挙げた取組が推進力に、行政・企業・団体一体となった仕組み作りがカギです

紙に携わる製紙メーカーから我々の業界、つまり川上から川下まで、また国も一体となって古紙のリサイクルを目標づけて取り組んできたので、やりやすい面もありましたが、具体的に進めるうえで、行政さんなり企業さんなり団体さんに、アピールして説明して一緒に仕組みを作っていくというところに一番時間がかかりますね。我が国は“基本的”な古紙のリサイクルの仕組みは既に出来ています。しかしリサイクル出来るという認識は出来ていても、相場に影響され価格が下がればリサイクルに回る分が少なくなって“ゴミ”が増えることとなります。そこでここ20年くらいで変わってきたのは、まず“ゴミを減らす”ことを最優先として、そのために輸出で需給調整し、さらに行政においても“ごみ処理コスト”の面から検討し、大津市の場合であればリサイクルのための補助金制度「大津市集団資源回収促進事業補助金」を作っています。

A：資源として“仕組みを回すことの大切さ”についての啓発が重要です

通常の物の売り買いと違って、ゴミは必ず出てくるもので、それを資源として仕組みを回すことが大切で、仕組みを回しながら必要なコストを維持する、つまり“環境と経済の両立”ということでしょうか・・・その辺の啓発が大切です。

Q：啓発活動はどのようにお取組ですか

A：市民団体や学校からの工場見学、出前講座などにも応じています

市民団体さんから古紙について勉強したいから工場見学させてくれとか、学校でも資源回収しており、自分たちが集めた古紙がどのようにリサイクルされるのかを学んで頂くために出前講座を行うとか、学校の場合、先生方の転勤によって転勤先へ学習の輪が広がっていくということもあります。



佐和山小学校での出前講座

訪問者 事業部 家城 弘和

最後に、滋賀県の会社として、もっと滋賀をアピールできないか、リサイクルを通して出来れば一番いいのですが、環境先進県としてもっと滋賀をアピールできるものがないか、さらに次の世代の育成についても熱く語って頂きました。

大津市地球温暖化防止活動推進センター（特定非営利活動法人 おおつ環境フォーラム）
〒520-0047 大津市浜大津 4-1-1 明日都浜大津 4F Tel：077-526-7545 Fax：077-526-7581
E-mail：info@otsu.ondanka.net HP：http://otsu.ondanka.net/ 編集責任：森口 行雄

センター通信

No.5

2017年7月10日発行



5/20、「坂本の歴史地区を楽しく歩こう」

『水を大切にしよう』～大津市企業局を訪ねる～

「いのちの水」といい、水はあらゆる生命の源泉。蛇口を回せばきれいな水が出てくる日常生活では、水のありがたみをつい忘れてしまいがちです。「湯水のごとく」という言葉は、大量に惜しみなく消費するたとえに使われたりします。これから夏に向かって水を使うことが増えます。今号では「水を大切に使う」ことを考えます。

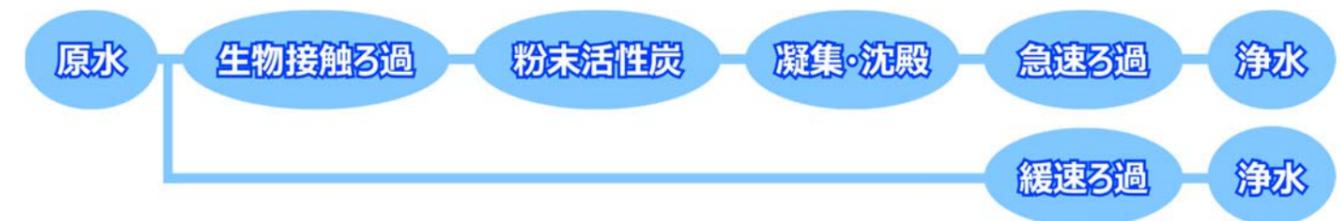
「柳が崎浄水場でお聞きしました」

★市民が飲んでいる水の源泉は…

昔、山間部は山の水を使った簡易水道でしたが、安定した給水を確保するために簡易水道を廃止し、現在は100%琵琶湖の水です。

★大津市の水道供給施設（上水道）はどこにありますか…

浄水場は、比良・八屋戸・真野・膳所・新瀬田とここ柳が崎の6か所、そして全市に水を配るために必要な加圧ポンプ場や配水池等の配水施設が135か所あります。琵琶湖の「取水口」から取り入れた水を「生物接触ろ過池」で微生物の働きを利用して臭気成分、アンモニア性窒素等を分解除去します。次に「粉末活性炭接触池」で臭気物質等を吸着除去します。その後、にがりや小さなごみを沈め、「ろ過池」で砂の層を通して水をきれいにし、さらに「浄水池」で塩素消毒します。これだけの工程を経てご家庭へ送る水ができます。



★多くの工程を経ているようですが、その中でエネルギー使用量（電力消費）の大きいのは、どの工程でしょうか…

浄水処理工程よりも浄水場からご家庭へ水を送るときに多くのエネルギーが必要となります。使用しているエネルギー源は電力のみですが、その使用量は大津市の地形と深く関わりがあります。水源である琵琶湖は低位置にあり、市街地が山地に向かって傾斜になっており、また南北に細長いので、送水ポンプ用の電力使用量が最も大きくなっています。次に原水を汲む取水ポンプです。全体で年間の電力使用量は約2,140万kWhになります。
*（大津市センター調べ：CO2排出量に換算すると約11,130トンになり、大津市全体の排出量の0.5%となります）

★一世帯当たりの水道供給量はどれくらいですか…

大津市の152千世帯に、一世帯当たり1か月に約22.8m³の水を供給しています。

*（大津市センター調べ：水1m³当たり200g以上のCO2を発生するエネルギーを消費します）

★水道を使うにあたって、市民の皆さんに気をつけてほしいことは…

漏水事故の未然防止と水道管の耐震化のために、古くなった水道管の取り替え工事を計画的に進めています。まれに漏水事故が起こります。事故が起きると水の流れが変わり、管の内側に付着しているさび等が流れ出し、濁り水がご家庭の水道から出ることがあります。濁った水が出た場合は使用を控え、大津市企業局安全サービス課（528-2607）へご連絡ください。

